研究部だより No.8

令和4年9月発行

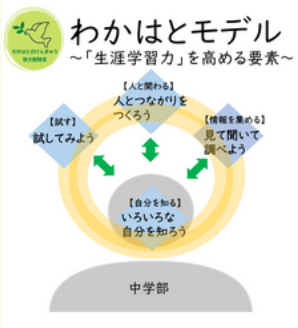
研究主題
新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる
～「生涯学習力」を高める授業づくりを通して～

9月20日に行われた、「中学部授業研究会（事前研）」の話題についてお伝えします。

全校授業研究会　中学部

中学部3年　生活単元学習「中3ファイブで石けん作り～あたらしいチャレンジpart2」

〈単元計画より、主なねらい〉
- 店の見学やインタビューを通して本物に触れ、いろいろな石けんがあることや石けん作りの基礎･基本を知る。
- 質問係、記録係などの役割に取り組みながら、自分たちで作った石けんについての感想を校内の職員に聞く。
- 場に応じた挨拶や話し方、話を聞く姿勢など、人と関わる際に大切なことに気を付けてインタビューをする。



〈授業者のしかけ〉
本物に触れ、石けん作りに必要な情報を得たり、様々な人と関わったりすることができるように、石けんの専門家（LUSH）に話を聞く機会を設定した。

【生徒の様子】
- 石けんの色や香り、形にはたくさんの形があること、石けんの泡立ちや効果などについて、体験を通して学ぶことができた。
- インタビューで学んだ石けんの作り方を思い出し、複数の色を層にした石けんを作ることができた。

〈授業者のしかけ〉
インタビューをする際に、作った石けんを紹介する場や実際に使ってもらう時間も設定した。

【生徒の様子】
- インタビュー相手に対し、石けん作りで使った材料を伝えたり作り方についての質問に答えたりして、積極的に他者と関わる姿が見られた。
- インタビューを繰り返し行ったことで、生徒が気付いた人と関わる際の大切なポイント（挨拶、相手の目を見る、笑顔）を意識して相手とやりとりができるようになってきた。

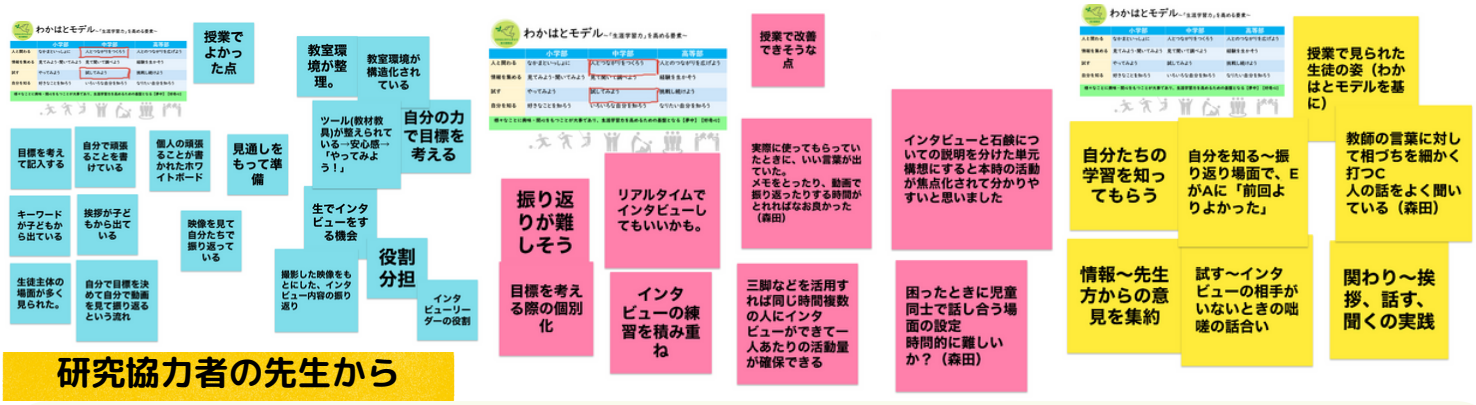
【本時の個人目標を考える】

【インタビューをする】

【iPadを使って振り返りをする】

研究会　協議で話題になったこと

今回の授業研究会は、11月に行われる教大協の授業研究会の事前として行いました。11月は、ハイブリット型での授業研究会を予定しています。そのため、新しくjam boardというアプリを試行し、電子付箋を用いて進めました。



研究協力者の先生から

〈秋田大学教育文化学部准教授　谷村佳則先生〉

〇学習指導案について
・単元設定の部分で、手を洗うために必要不可欠であるが、今の時代、固形石けんは見られないため違和感はなかったか。
・石けんは使ってもらえるもの、作りがいがあるもの、価値観が大切である。
・指導について、わかはとモデルの仕掛けのあり方が記入されていて、分かりやすい。
・生涯に渡って学び続けるために様々な体験をすることは必要である。

〇授業について
・ICT機器を使い、授業を進めていた。「何かを作ってみたい」となったときに、学び直しにつながるのであればうれしい。
・インタビュー予定の人がいなかったときに、生徒から「誰か違う人に聞きたい」と考え、自分から動けなかったことが残念だった。
・生単の授業を通して、「早く明日が来ないかな」と思うためには満足感や成就感が必要である。

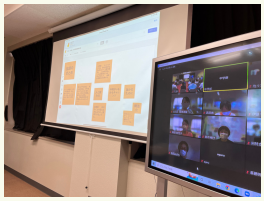
〈秋田大学大学院教授　武田篤先生〉

・見通しをもち、やることが分かって動いていてよかった。
・振り返りでは、iPadのAirDropをうまく活用していた。
・クラスで固形石けんを使っている様子が見てとれた。固形石けんの学習を工夫して進めてほしい。

〇教大協に向けて（11月実施）
・VTRの撮影の方法、役割分担を考え、オンライン参加者が授業を理解してもらえるように工夫して撮影してほしい。
・わかはとモデルの説明や授業でのつながりを丁寧に示すことが大切である。
・授業説明は、画面共有をして参加者が理解できる工夫をしてほしい。

〈能代市教育委員会　特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷勝先生〉

・これまでのインタビューの流れや内容を黒板に視覚化したことで、生徒が忘れていたことを想起できる。また、本時の活動に見通しをもち、意欲の高まりにつながる。そして、比較もできる。
・石けんコーナー、体験コーナー、インタビューコーナーの場の設定や動線が明確で生徒が活動しやすい。
・生徒も教師も「中3ファイブ」の名札を着けており、テーマを実現しようとする一体感を感じた。マイクの他に、役割が明確になるよう、腕章(記者、記録等)があれば、更に雰囲気が出る。
・生徒手書きのテーマ「花のにおいがしてカラフルでいろいろな形の石けん」があることで、全員が同じ方向を向くことができている。欲を言うと、誰のためにがあるとよい。
・本時のめあては、「あいさつに気を付けてインタビューをしよう」であったが、あいさつの部分がお願いします等の言葉なのか、あいさつの仕方(元気な声、大きな声、笑顔等)なのか、やや曖昧に感じた。それでも生徒は自分の目標を書いていたので、問題はなかった。目標が曖昧になると、評価も教師の言葉掛けなど、全てが曖昧になるので気を付けたい。
・めあてや自己評価を早めに終えたとき、ハプニングが発生したときなど、いろいろな間が生じる。そのときに、子どもからの言動を待つのか、机間指導で動くのか、ヒントを与えるのか、別の課題を用意しておくのかなど、いろいろな対応がある。どれが正しいかというよりも、T-Tでねらいを確認することで、答えが見付かる。間の使い方は、授業の面白さでもあり、教師の考えや力量が試される場面でもある。
・子どもへの支援とかけて音楽のフェードアウトと解く
その心は、どちらも徐々に小さくすることがポイント！！



next→公開研究協議会　事前研（高等部）の様子をお伝えします